

野鳥お勉強会と人と鳥と・・・

江別市 富川 徹

1. 鳥見の昔と今

いきなり暗い話ですみません。北海道野鳥愛護会（以下、「愛護会」という）の会員数ですが、昨今、高齢の理由及び会費未納による退会に加え、新会員の入会者も少なく会員数の減少傾向がみられます。特に若い人の入会がほとんどないことで平均年齢は増々高くなるばかりです。これは会を維持運営するうえで極めて大きな痛手であり深刻な問題として捉えなければなりません。今さらではありませんが、会の維持存続のために何らかの方策を検討せねばならないとも思います。傍からみると“鳥好きなおじさんとおばさんの集団”、“中高年のウォッチングツアーのご一行”を呈している感は否めないでしょう。他方、会員減の悩みを持つのは他の野鳥関係及び自然団体などでも同様の傾向にあり、現代社会を象徴する時代変化にもうかがえますが、何か“社会のゆがみ”みたいなものを感じます。

昨今ではインターネットやメディア等の大幅な普及で情報が飛び交い、例えば鳥を覚えたいということで少し前では、会などの組織に入って探鳥会等を通じた人とのコミュニケーションから「教えられる、覚える、知る」のが普通であったといえましょう。すなわち、まず会などに入会して諸先輩たちと探鳥会に出かけることから始まり、双眼鏡と図鑑を手にしたの首っ引き、そして語らいのなかで鳥を識別し覚えました。しかし今、図鑑類は溢れんばかりで、パソコンを開けば有りとあらゆる鳥情報が瞬時に得られ、写真もデジカメの性能向上が相俟って、珍しい鳥などもリアルに美しく画像としてみる事ができるのです。何も野鳥団体（会）などに入らなくても、手軽にパソコンや電子機器の操作ひとつで情報はいつでもどこでも簡単に取得することが可能となりました。付け加えると、探鳥会や観察会などのフィールドに行かなくても探鳥会気分になれるということで満足している人がひょっとするといえるのかも知れません。

私としては、鳥見はやはり探鳥会といったフィールドと人との出会いという生身の接触行動があってこそ、本来の目指すものの質の高まりや深まりがあり、人と人のコミュニケーションの中から人間らしさの営みが得られるものと信じています。少し堅苦しくなりましたが、まさに探鳥会は人と人のコミュニケーションそのものであり、その存在意義は極めて大きいものと思っています。

“鳥仲間と一緒に探鳥し鳥を語ることはとても楽しい”ことです。このことは若い人を含めこれから鳥を覚えたい、関心がある人たちにも基本的には理解してもらえることだと確信

しています。愛護会の会員としても、今一度探鳥会を通じて会活動を再確認しておくことが重要であると考えています。

2. 野鳥お勉強会の誕生まで

私の主宰する野鳥お勉強会（以下、「お勉強会」という）は、愛護会の会員らによって盛りあがりをもせ、支えられ、そして今日まで続けられてきたといっても過言ではありません。

お勉強会は、1987年（昭和62年）にスタートした会です。当時は、自然ブームが定着化し自然環境や自然保護という言葉が聞かれて久しい頃で、愛護会の探鳥会はいつもにぎわいと活気に満ちていたことを思い出します。また世では自然や環境に関するシンポジウムやイベントも数多く催され環境分野への高揚がありました。しかし、講演会の聴講では、どちらかというと“聞かされる”というやや一方通行的なパターンが主流であり、質問や意見も一般的で簡単な質問などを言うには躊躇するような雰囲気は漂っていたと記憶します。そうした中、もっと身近なことを自由に語り話し合う、そして楽しく情報交流できる場としてサロンがあればいいと個人的な思いがありました。まさしく「好きな鳥や自然のことを仲間と楽しく語り合える場」の創出を描いていたのです。

その背景として少し前になりますが、鉄腕アトム原作者の手塚治虫氏（漫画家）が、「人の意思の交流が新しい社会づくりに貢献する」として、「人の出会いの場」づくりを目指し



探鳥会風景



野鳥お勉強会風景 朝日新聞05.2.2より

たサロン「集」をつくっていたことに豪く感動したことがあります。ゆえに、それらの考えを土台に、「鳥や自然の疑問や不思議を解消する場につなげる」、「身近な話題と人との交流から人的なネットワークの構築（会員獲得）を目指す」ことを我々もやってはどうかと考えたのです。そんなことを当時の愛護会副会長の柳沢信雄先生にそれとなく話すと、「それはいいことだ！」と話が弾む形で、いつも幹事会后などに必ずや寄っている居酒屋（当時「夢二亭」）の店主に話すと、時世（週休2日制による土曜休日で、ビル街のサラリーマンが来なく売りに上げて困っていた。そのため開催は歓迎され貸切可能となる）があつてすぐに意気投合となり、とんとん拍子に会発足へと至ったのです。

3.“常連組”は愛護会の皆さん

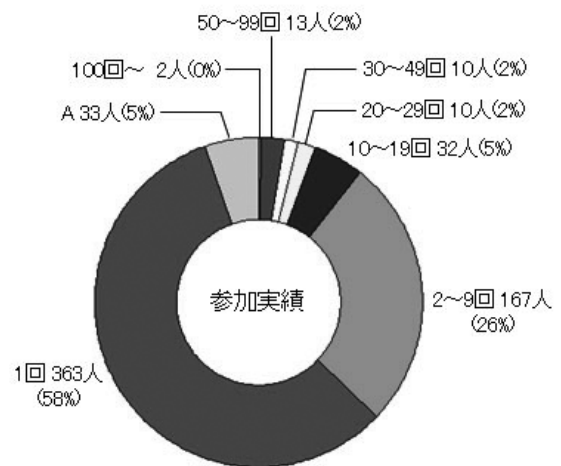
お勉強会は、月1回、今は第三土曜日、会場は概ね居酒屋で行っています。また、地方開催（札幌以外の地域）も行っていますが、最近では「野鳥お勉強会 in 帯広（2010.11）」、「野鳥お勉強会 in 旭川 外来種ワークショップ（2007.9）」があります。

お勉強会の「お」は“あまり堅苦しくなくざっくばらんに”ということの意味合いがあります。会場は地方開催などを除くと大半が居酒屋で、お酒のある飲食を伴う設定（宴会形式）で行われます。今日まで長年に渡って会が存続しているのもある意味で“お酒のおかげ”と言ってもいいのでしょうか。でも、「勉強会なのにお酒を飲みながらなんてだらしない、不謹慎、不真面目、のんべえ会」などと周りからお叱りを受けそうな言葉が返ってきそうですが、そんな不評などはこれまでほとんどありません。話題発表する講師や参加者の人柄は勿論のことですが、テーマや内容等はどれをとっても“真面目”そのもので、“お酒の力を借りて”ではないですが、各々の講師の話題や関心事をダイレクトに熱く語る姿勢、自由に交流する場の存在ということでは、他の会などではないものとして自負できるものと受け止めています。

お勉強会の開催回数は1987年の第1回開催から今年2011年1月で第283回を数えます。このうち、参加者数については54

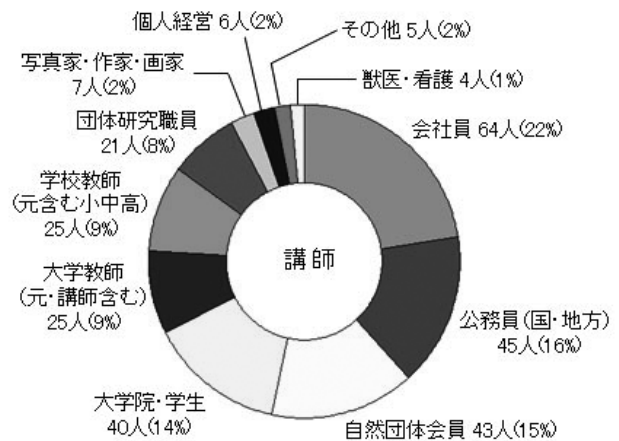
回までの参加者が不明なために、ここでは都合それらを省き整理しますが、55回から今年1月の283回までの228回の開催で、この間の参加者数は3291人、平均では14.3人/回という数字になります。平均人数が出たので単純に第1回から54回までに当てはめてみると770人とみることができ、第1回からこれまでの全参加者を推測してみると述べ4000人を超えることとなります。また、55回以降は、参加記録をとっていますので内容実績などの分析が可能です。ですから、公表は差し控えますが一人ひとりの参加回数なども分かるというものです。

次に、参加実績についてみると、参加回数がたった1回というのは363人(58%)、2～9回は167人(26%)となり、全参加者の630人に対して、大半が1回もしくは10回に満たない“低参加組”となっており、リピーターの少ない残念な結果であることも隠せません。こうしてみると、都合の整理ですが“時々参加組”の10～19回以上は計42人(7%)で、“常連組”といえそうな30回以上はわずか25人(4%)とさみしいものです。しかし、“常連組”とした参加者のうち愛護会会員は13人(2%)



参加実績

- 229開催（第55～283回）
延べ参加数3291人
- 図中Aは54回開催以前



講師（283開催中285テーマより）

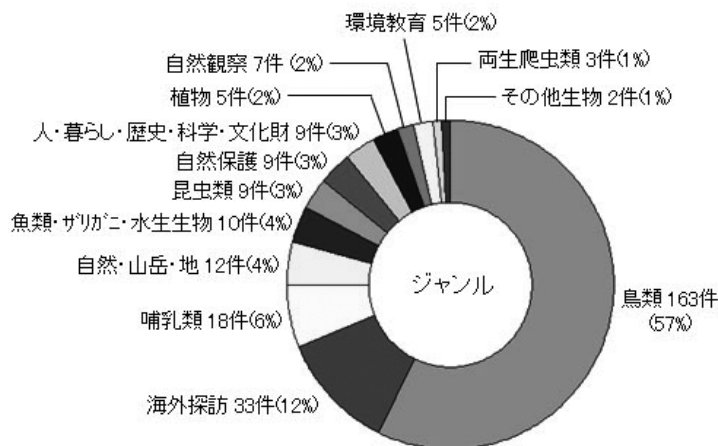
を数え、本会の大きな支えになっていることが確かと分かり、嬉しいものと受け止めています。

さて、講師についてみると、複数回を担当される講師もいますが、相対的に発表時の職業で整理すると、会社員が64人(22%)と最も多く、次いで公務員45人(16%)、自然団体会員43人(15%)、大学院・学生40人(14%)の順となり、以下の大学教授や学校教師、団体・研究職員などの専門的な立場となる先生及び研究者を上回っていることがおもしろいことといえます。すなわち、自主的に得意な分野の話題について熱弁を振舞うというシステムとなっているので、参加者も納得のいく議論ができる魅力があり、他のシンポジウムや講演会などにはない特徴を有しています。また、本会を通じて自然環境に関心を持ち、関連の職業やボランティアなど各方面で活躍されるメンバーを排出していることも少なからず自負できるところに思います。

4. 語られてきたこと

気になる話の内容ですが、ジャンルとして区分してみると、やはり野鳥お勉強会というだけに「鳥類」に関する内容が163件(57%)と最も多く6割近いものであり、続いて海外探訪32件(12%)、哺乳類18件(6%)という順になっています。本会は野鳥のみならず自然のことは何でも行っていますので、山や地形、魚、サリガニ、昆虫、自然保護、植物、その他とジャンルは様々です。また、海外の野鳥バージョンの非日常的なところでの貴重な体験や珍しい鳥、観察テクニックの話のほか、北海道の代表種であるヒグマ、エゾシカ、そして最近では希少なコウモリや外来生物アライグマの分布・生態などの哺乳類も人気です。

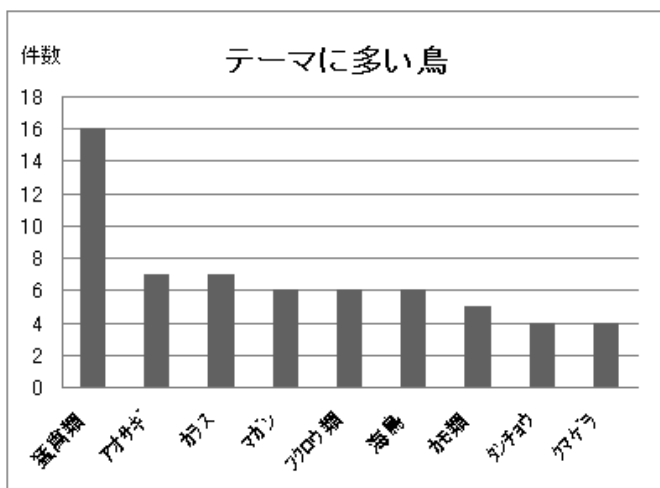
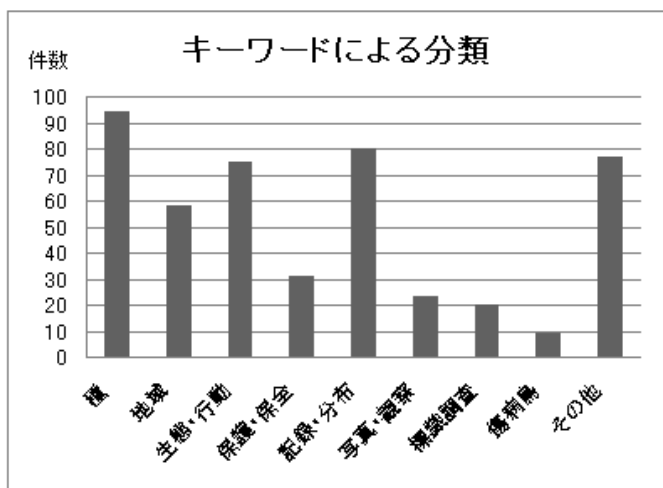
一方、その他系の分野として、「飛翔に憧れて」や「鉄の鳥と環境破壊」といった現代の航空機の話、「地球にやさしい土の話」、「廃棄物対策の現状と課題」、「遺跡調査からの自然情報」、「恐竜発掘体験」、「蘭学事始め(オランダの環境の取り



ジャンル (283 開催 285 テーマより)

組み)、「地域活性化の話」など、気分転換となり興味あるお話もあり、どれも身近な環境に関わっての話題として新鮮に聞き入れるものです。加えて、「熱き「鳥」を語る講師たち」と題して自ら参加した想いを自らのメモと似顔絵で振り返る話は、「何でも会にするというこの会ならではの」で行われ、会を振り返る格別に有意義なものといえましょう。

鳥類についてはもう少し掘り下げてみよう。開催内容から3つのキーワードをあげて分類をしてみると、「種」、「記録・分布」、「生態・行動」、「地域」などに部類され、「鳥について多角的にいろいろと知りたい」という内容が多く目立ちます。また、北海道という地域特性、種、生活、生息状況といった関連での内容でも目を引きまます。テーマで話題の多い鳥種(類)は、猛禽類の16件で、アオサギ、カラス、マガン、フクロウ類、海鳥、カモ類、タンチョウ、クマガラなどがあります。特に猛禽類をはじめとして、マガン、タンチョウ、クマガラ、フクロウ類の希少種においては高い人気があり、この時は参加者もやや多く集まっています。また、これらを含め取り上げられた鳥は46種(類)に上りますが、その他アホウドリ、トキ、エゾライチョウ、ウズラなどの希少種もあれば、ウミネコ、ヤブサメ、スズメなどのやや一般的な種について



テーマの鳥種(類)		
アホドリ	チゴハヤブサ	クマゲラ
コシジロウミツバメ	ワシタカ類	アカゲラ
アオサキ	エゾライチョウ	シヨウトウツバメ
サギ類	ウスラ	ツバメ
トキ	タンチョウ	イワツバメ
マガン	ツル類	ハクセキレイ
オオハクチョウ	シキ・チドリ類	ビンスイ
ガンカモ類	オオセグロカモメ	(カラフトビンスイ)
ミサゴ	ウミネコ	ヤブサメ
オジロワシ	ウトウ	ウグイス
オオタカ	ツツドリ	スズメ
ハイタカ	シマフクロウ	ムクドリ
ノスリ	リュウキュウコハスク	ハシホソガラス
サシバ	オオコハスク	ハシブトガラス
チュウヒ	フクロウ	
シロハヤブサ	ヤマセミ	
46種(類)		

も専門的ではありますが、比較的身近で分かりやすい種の話も好評でありました。また、記念講演会として、100回記念、10周年記念、150回記念、200回記念、20周年記念を行ってききましたが、どれも第一線の先生方をボランティア(ただ!)でお呼びしたというのも“この会ならではの”ではないでしょうか。いづれにしてもこれまでの話を可能な限り掘り起してとりまとめていきたいとも思っています。

なお、お勉強会を一緒にはじめた柳沢先生の「中国のトキ事情」(第113回1996.11)の話は印象的でした。当時、日本産トキが1羽(ミドリ)となってしまったところで、人工増殖を図るという取り組みが行われる中、野生トキが確認されたという中国中央部にある陝西省洋県に、(財)日本鳥類保護連盟の中国トキ保護視察団として訪ねられた時の状況報告や感情話でした。「人とのかかわりの中でどう鳥と付き合っていけばいいか」という取り組みや具体的事例を示しつつ、自ら体験を通じた貴重なお話は有意義なものでした。今では、それらを踏まえながら、我が国も佐渡トキ保護センターで増殖に成功し数を増やしている現状に繋がっていることはまさに灌漑するものです。

お勉強会の開催内容は、一般的に生きものの保全や取り組み

に繋がるような基本的方向を示唆する先進的な話題等も比較的多く認められ、加えてアカデミックな部分を持ち備え、かつ真面目な講師陣に恵まれているということに我ながらあらためて驚かされます。

おわりに

鳥と人とお話、そして少しだけ?お酒の好きな方々の集うお勉強会ですが、何より愛護会の皆さんのお気持ちのあったことを知ることができました。ここまで続いているのは皆さんの多大なるご協力の賜があつてと感謝いたします。

昨年度、お勉強会はサントリー世界愛鳥基金の「地域愛鳥活動助成」を受け、「もっと野鳥を語り関心を広めたい!会活動の環境整備とホームページ作成」に取り組み、欲しかったプロジェクターの入手とブログ公開にこぎつけることができました。これで世間からも少しは認められる会になったと、“肩の荷が降りたという気持ち”といたいのですが、私を含む周りの関係者も高齢の仲間入りということで、後継者不足に悩むといわざるを得ません。

“継続は力なり”とはいいますが、いつの間に今年25周年(四半世紀)そして来年は300回開催を迎えることとなります。何とか“記念開催を行わねば・・・”と気持ちばかりが逸るところですが、冒頭に記したようにこの会こそ“会活動の再確認”を自らの胸に抱き、“これまで通り無理せずし心し進めるしかない”と思っている次第です。今後も無理せずのご参加はもとより、ご指導ご協力の程よろしく願いいたします。

野鳥お勉強会

開催日時：毎月第三土曜日(原則)18:00～

開催場所：鳥太郎 大通店

札幌市中央区大通西5丁目昭和ビル地下1階

問い合わせ：野鳥お勉強会 代表 富川 徹

E-mail: tomikawa@toriben.org/

homepage: <http://www.toriben.org/>